

ふね遺産は審査委員会において最終的に決定されますが、日本船舶海洋工学会のふね遺産認定実行委員会といたしましては、以下のように認識しております。

- 「箱館丸の独自性はどの程度と判断したか。亜流かどうか。」というお尋ねかと思いますが、
- (1) 続豊治は函館に来たフランス艦船の乗員から船の構造・技術を習い小型帆船2隻を建造しましたが、それはバッテイラと呼ばれる小型船（端艇・短艇とも書かれる。10人程度乗り組み）でしたから、スクナー建造には更に知識の習得が必要でした。
 - (2) 函館でスクナー建造に至った経緯。ヘダ号（スクナー型）の性能に注目した幕府はその後類似の君澤型を連続建造しましたが、そのうちの2隻を函館に廻すという話となりました。しかしなかなか函館に来なかったため、函館奉行所が続豊治に製造させたのが箱館丸です。従って君澤型の話がなければ函館奉行所は続にスクナー建造を依頼することは無かったと思われます。
 - (3) このような事もあって、続は君澤型の情報は得ていたはずで、現に津軽藩士が函館で書き写した津軽家文書中の図面（板材の蒸し曲げ器）には「君澤型」の文字も見られます。但し続が得ていた君澤型の情報はどこまでのものであったか詳細は不明です。
 - (4) 以上の経緯のもと、以前から研究熱心な続が独自の経験・検討も含めて箱館丸（スクナー型）を設計・建造し、その後の北海道地方における多くの類似船建造の端緒を開いたということで「ふね遺産」としての価値ありと認められたものです。
 - (5) お尋ねの、箱館丸は「ヘダ号」ひいては「君澤型」の亜流かどうかについては「亜流」の定義にもよりますが、単に君澤型の図面をトレース拡大しただけならば亜流と言えます。しかしながら津軽家文書中の箱館丸の正面線図（正面から見た、船体長手方向の各断面のフレーム形状を描いたもの）は明らかにヘダ号、君澤型と異なる部分があり（船底の傾斜形状、舷側が垂直か曲線かなど。箱館丸の中央付近舷側は垂直で和船の流れを感じます）亜流とは言えないものがあります。また帆の枚数もヘダ号などに比べて増やしていますからこういった点からも独自の工夫があったと言えます。
 - (6) なお津軽家文書では、進水するために必要な海底の土砂浚いの方法といった図面もあり、これは「ヘダ号」関係の文書には無いもので、独自の価値があります。
 - (7) 要するに、スクナーという既知の帆船形式自体を採用したという点では箱館丸は亜流ですが、フランス帆船や君澤型及び従来型の和船も知った上でスクナーの優れた点に着目し、独自の工夫を加え建造したという点では、当時の造船技術・情報環境を考えると亜流では無いと言えると思います。（以上）